
世界ノ隙間

白梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界ノ隙間

【Nコード】

N3672E

【作者名】

白梨

【あらすじ】

いきなりだが、俺は俺は異世界なんてものはこれっぽっちも信じてはいない。サンタクローズがいないと気づくよりも前に俺は異世界の存在を否定していた。それは間違いない。因みに俺がサンタクローズがいないという事実気づいたのは初めて親にクリスマスの話をされた3歳の時だ

第0話（前書き）

更新が絶望的に遅いです。

飽きっぽい人は読まないことをお勧めします。

第0話

いきなりだが、俺は俺は異世界なんてものはこれっぽっちも信じ
てはいない。サンタクロースがいないと気づくよりも前に俺は異世
界の存在を否定していた。それは間違いない。

因みに俺がサンタクロースがいらないという事実気づいたのは初
めて親にクリスマスの話をされた3歳の時だ。

当時の俺は聡かった。今はどうかはともかくとして、だ。その話
を聞いてまず最初に親に向けて言った一言

ソリに乗って煙突から入ってくる？ 何寝ぼけたことぬか
してるんだこの野郎！

……あー、因みに繰り返すようで悪いが、この時若干3歳だ。昔
は突っ張っていたんだな、俺。

ともかく、俺はサンタクロースよりも異世界の存在を先に否定し
ていた。異世界なんて言葉、3歳の子どもは普通知らないはずなの
だが、どうしてか知っていた。うん、ミラクルだな。

……つまり、何が言いたいのか。

俺は今、その異世界という場所にいます。

なんの嫌味だ、これ？

第1話 とりあえず、いじどじ？

朝、目が覚めたら異世界にいました、か。……あまりにも典型的過ぎないか、これ？

目を開けるといつもの部屋はそこになくて、あたり一面砂漠だった。

……うん、なんというか、五感から察するにここは異世界であつて夢ではないと分かったところで早速、異世界での第一声を高らかに叫びたいと思う。

「つか、俺を日干しにする気がこんちくしょーっ！」

現時点で俺が持つ不満を絶叫してみた。勿論返事など返ってくるはずがない。

でもまあ、某ラノベの主人公のようにいきなり迫害されなくて良かったと思うよ、マジで。いや、野垂れ死によよりも迫害の方が幾分かマシなのか？

ともかく人を探さなくては。原住民に会わないことには何も始まらないのだから。

……で、とりあえず、村どこだ？

って、あたり一面砂漠なのに村なんて見つかるわけないだろ、俺！

一人でポケッツコミをしながらじっとしていても暑いだけなので、
思うがままに歩いてみることにした。

1時間後 飽きて砂漠で寝っ転がっている俺がいた。

「つか、つまらねえよ」

独り言をぼやく。

歩いても歩いても同じ風景。暇だ。それに眠い。

今の若者は飽きやすいのだからここで寝ても仕方がないよな、と
俺は自分に言い訳をして静かに目を閉じた。

意識が遠ざかる一瞬、暗闇の向こう側に誰かの気配を感じたが、
すでにその時俺の思考は停止していた。

第2話 『疊』って三種類くらいなかったっけ？（前書き）

LANNADを発売日当日に買いました。現在、誰を攻略しようか迷っています。優柔不断なので気がついたらBAD ENDになっ
ていそいで怖いです。

第2話 『疊』って三種類くらいなかったっけ？

気がつくのと、俺はベッドで寝ていた。

かといって俺の部屋のベッドではない。そうであってほしいのは山々だが、生憎この掛け布団は俺がいつも使っているものとは全く違うし、そもそも俺の部屋はこんなにも広くない。

見た感じ、この部屋は軽く俺の部屋の三倍はあった。因みに俺の部屋は八畳。

……それにしても、俺は何故こんな所にいるのだろうか。

首を捻らせながらベッドから降りようとしたその時、部屋に誰かが入ってきた。

「おう、やっと目を覚ましやがったか」

そいつは紫色の肌をしていた。なんつーか、ファンタジック？

それに耳が少し尖っている。RPG好きの奴ならエルフだ、と歓喜しただろうが、生憎俺はそこまでゲームはやらないし、そもそも起きたばかりでそんなにテンションを上げてなどいられない。

でも、そいつはエルフとか少しばかり違う外見をしていた。

眼と髪が黒いのだ。金や銀など神々しい色ではなく、だからといって禍々しくもなく、ただただ落ち着いた色だった。その髪を八分に刈って全体的にサツパリとした雰囲気だった。

「なんだ、喋られないのか？」

言われて気づいた。そういえば、何故俺はこの世界の言語を理解できるのだろうか。

「……こじは」

言語を理解できるのは分かったが、俺の言葉が通用するとは限らない。だが、試してみる価値はあった。

「ここは、どこだ？」

ハッキリとゆっくり喋ってみる。

「ここか？　ここはライネーグの村だよ」

通じた。会話が可能だと分かると途端に気が抜けて体から力が抜けていく。

「ってオイ！　大丈夫か！？」

男が俺に向かって叫ぶ。少しずつ遠くなっていく声を聞きながら、俺は冷静に次に男に会ったときに聞くことを考えて、ゆっくりと意識を失っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3672e/>

世界ノ隙間

2010年10月26日05時20分発行